

「三宝通信」法話

浄土宗 天上山大念寺
住職 大島祥明



二千件の葬儀を行ってきたのは、 霊の探求のため

私がかかわった二千四十六人の方の葬儀の多くは、葬儀社からの依頼によるものでした。毎月平均十五人、もつとも多いときには、一か月に二十八人の葬儀になりました。

そうになると、ほとんど毎日、通夜に葬儀という日々です。毎日、どこかの火葬場に行っていました。一日に、火葬場を三か所もまわることもありました。

多いときには、一年で二百九十四人の方をお送りいたしました。年間の車の走行距離は五万六千キロにもなりましました。

「いったいなぜ、そんなにかむしやりに葬儀を執り行ってきたのか」と思われることでしょう。

それは、私なりに実感した霊(本人)について探求することが、ひとつの目的となっていたからです。

——今日出会う霊(本人)は、どのような方だろうか。どんなことを訴えているだろうか。

それは、ある種、なにか実験を重ねて研究しているような気持ちでした。未知の世界が少しずつ明かされていく喜

びでもありました。

霊(本人)は一人ひとりまったく性格もありようもちがうのですから、葬儀のたびにいつも新鮮な体験でした。そして私は、霊(本人)の状態を実感しては、その受けとった感じを遺族の方と語って確認し、克明に記録していったのです。

霊についてなにか述べようとすると、ほとんどが「思いこみ」とか「宗教や信仰」だとか、「特殊な霊能者の世界」のようにとらえられてしまいます。

しかし、私のつかんだ実感から言えるのは、たしかに霊(本人)は実在するのです。決して思いこみや信仰からではありません。

そのことを、主観的な表明ではなくて、だれもが納得のいく客観的なデータとして残しておきたい。その気持ちから、出会うた霊的な体験を、一件一件、記録していったのです。

客観的な統計データには、最低でも二千件以上のサンプルデータが必要だといいます。だから、最低でも二千件以上のデータがなければ、説得力をもたないと思いました。

そういうわけで、私は無理をしても二千人以上の方の葬儀を執り行おうとしたわけです。結果、二千四十六件もの葬儀を経験することになったのです。

●大島祥明住職著『死んだらおしまい、ではなかった』(PHP研究所刊)より抜粋。同著の問い合わせ ☎03-3323-9625 (PHP研究所ビジネス出版部)